Mar　2015　No. 47

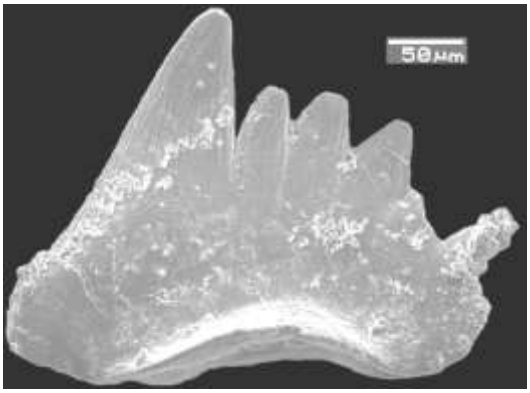
大垣市金生山化石館

化石館だより

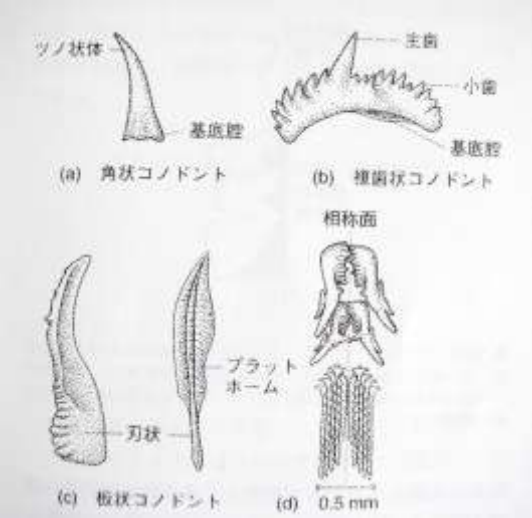
コラム

コノドント化石

コノドント（*Conodont*）というとても小さな化石をご存知ですか。コノドントはイギリスや北米、ロシアなど世界各地から発見されています。日本でもシルル紀から三畳紀に至る各地の地層から多くのコノドントが報告されています。もちろん金生山からも発見されていますが、これまで詳しい研究がなされていませんでした。近年になって中部層の石灰岩から非常に保存状態の良いコノドントが多数見つかるようになり注目されています。



金生山産コノドント化石

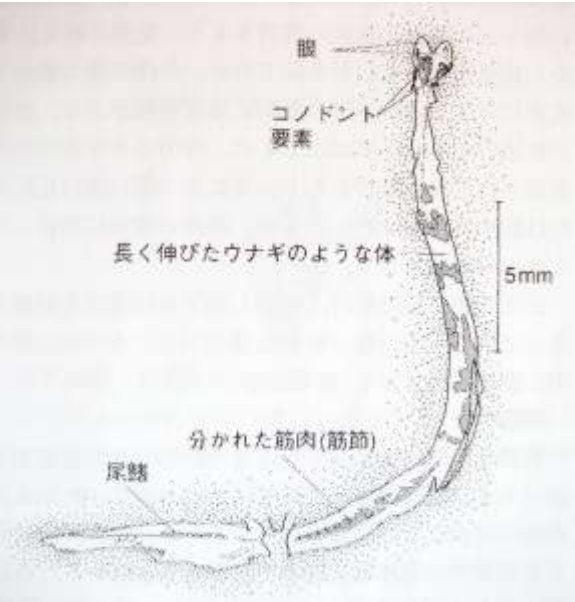


主なコノドントの型（「ひとめでわかる化石のみかた」より）

コノドントは、古生代初めのカンブリア紀から中生代初めの三畳紀（約６億年前から１億８千万年前）までの地層から発見される、歯のような形をした微化石です。その大きさは、0.2ｍｍから１㎜程度で、顕微鏡でなければ観察できない程の小さなものです。その形態は、角状のもの、複歯状のもの、板状のものなどがあり様々です。コノドントは、1856 年にロシアのクリスチャン・ハインリッヒ・パンダーによって魚類の歯として報告されましたが、その後三葉虫の爪であるとか環形動物（ゴカイなど）の顎であるなど様々な意見が相次ぎ、長らく正体不明の化石となっていました。

コノドント動物の説明には、1983 年にブリッグズによって報告された図版がよく用いられています。コノドント動物については様々な説がありますが、現在ではこれが真のコノドント動物であろうと考えられています。その姿は、長く伸びたウナギのような体をしており、コノドントはその咽頭部分に複数が組み合わさった形で描かれています。コノドント動物は、最長 50 ㎝程のメクラウナギかヤツメウナギのような脊椎動物で、咽頭部にあるコノドントは、捕えた餌を押しつぶすために使われていたと考えられています。

コノドント化石が注目されるのは、三葉虫やアンモナイト、放散虫などと同じように、地層の堆積年代を決定づける示準化石として重要視されているからです。金生山では、これまでフズリナによって地層の堆積年代が調べられてきました。特にネオシュワゲリナ、ヤベイナについては、その進化の過程が金生山で詳しく調べられており、金生山を構成する赤坂石灰岩はその模式地として世界的にも知られています。その金生山でコノドントが発見されるようになったことにより、新たな尺度を用いて堆積の様子を見直していくことができるようになります。赤坂石灰岩は、パンサラサ海という大洋中央部で堆積しました。このような石灰岩は、日本列島には各地に存在しますが、世界的にはごく僅かしか残されていません。コノドントがペルム紀の大洋に存在した礁生石灰岩から発見されるようになったことで、古環境や古地理などでも新たな発見が期待されます。



コノドント動物の全体像
「ひとめでわかる化石のみかた」より

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆　　**お 知 ら せ**　　◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

３月１５日（日）　市民報告会開催

奥の細道むすびの地記念館　２階　１０：００より

大垣市委託の金生山化石調査について、2013 年に実施した調査の分析結果について報告します。（参加費無料）

「金生山再発見」販売中
「金生山化石調査報告書」３月末刊行

開館５０周年記念の「金生山再発見」を販売しています。

化石館のあゆみと金生山の化石や鉱物の紹介、また金生山にかかわる最新の話題が紹介されています。

大垣市委託「金生山化石調査」に関する報告書（2012-2013 年）は、３月末に刊行を予定しています。

金生山化石館・文化事業団事務室にて販売中

問い合わせ：　大垣市金生山化石館　　電話　（0584）71-0950　（ファックスも同じ）
Email　kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp